



◎「自主・好学・敬愛」を校是の三綱領とし、社会をたくましく生きる、自立した人間の育成を目指す。桜島一周遠行、音楽部や合唱部による昼休みのコンサートなど、ユニークな行事が多い。本館は県立第一高等女学校の校舎として使われた建物で、講堂と共に国の登録有形文化財に指定されている。

設立
1963(昭和38)年
形態
全日制／普通科／共学
生徒数
1学年約320人
10年度入試合格実績(現浪計)
国公立大は、千葉大、東京学芸大、横浜国立大、九州大、熊本大、鹿児島大などに220人が合格。私立大は、慶應義塾大、立教大、早稲田大、立命館大、同志社大などに延べ183人が合格。
住所
〒892-0846 鹿児島県鹿児島市加治屋町10-1
電話
099-226-1574
Web Site
http://www.edu.pref.kagoshima.jp/sh/chuo/

鹿児島県立 鹿児島中央高校

進路意識向上

進路と学年が連携した働き掛けにより 難関大へと意欲を高める

変革のステップ

背景

◎生徒と保護者は地元志向・安全志向が強く、実力がありながら難関大に挑戦しない生徒が多かった

STEP 1

実践

◎難関大説明会などで生徒の意欲を喚起する一方、データの共有や進路と学年の連携により教師の意識も高める

STEP 2

成果

◎成績中・下位層から難関大に挑戦する生徒が現れた。教師に生徒の可能性を引き出そうという意識が高まる

STEP 3

高い進路目標を 持たない生徒たち

鹿児島県立鹿児島中央高校は、例年、国公立大に200人以上が合格する、県を代表する進学校の一つだ。好調な進学実績を維持しているが、教師たちは必ずしも満足していなかった。かつての同校は、九州大をはじめ旧帝大レベルの大学に、毎年2桁を超える合格者を出していた。ところが、1980年代頃から難関大合格者は徐々に減り、17年前の29期生の九州大10人合格を最後に、2010年3月に卒業した45期生まで1桁という状況が続いた。

背景には、生徒・保護者の地元志向・安全志向があった。模試で九州大にB判定が出ても、確実に合格できそうな鹿児島大を受験するといふように、難関大に挑戦できる力がありながら、高い目標を持つとしない生徒が目立った。そうした姿勢は、10年度入試の合格実績においても、鹿児島大123人に対し、九州大5人という数字にも表れている。進路指導部主任の玉利博文先生は、その原因を次のように推測する。

「高校入試における本校の生徒の得点率は総じて7〜8割です。それだけの学力があれば九州大の合格者は2桁を超えるはずなのですが、多くの生徒が地元の鹿児島大を選びます。保護者は『我が子を手元に置いておきたい』と願って、生徒は『中央高校ならば鹿児島大』

という思い込みがあるようです。1年生の時から高い目標を意識させ、難関大に挑戦する意欲を育てる必要があると感じていました」

中学校から得た情報を基に 生徒把握と意識付けを行う

難関大を目指すには、低学年から意欲を持たせ、目標に向けて学ぶ姿勢を養う必要がある。改革は08年に入学した46期生から始まった。

まず着手したのは、新入生の特徴を入学前に把握することだ。同校の教師が2人1組で生徒の出身中学校を訪問し、中学時代の担任から生徒の長所や伸ばしてほしい点などの情報を集め



鹿児島県立鹿児島中央高校
玉利博文 Tamari Hirofumi
教職歴26年。同校に赴任して8年目。進路指導部主任。「意欲は能力を凌駕する」



鹿児島県立鹿児島中央高校
池平和博 Ikehira Kazuhito
教職歴38年。同校に赴任して10年目。3学年主任。「生徒の立場に立つて考える」



鹿児島県立鹿児島中央高校
福元洋介 Fukumoto Yosuke
教職歴22年。同校に赴任して7年目。3学年主任。進路指導部副主任。「苦あれば楽あり」

た。進路指導部副主任の福元洋介先生は次のように述べる。

「中学校の先生からは、中学校の調査書や入試の面接ではつかみきれない、生徒の生の情報が得られました。この生徒はこれが得意だからもつと伸ばしてほしい、この生徒にはリーダーシップがあるからクラスを中心にされるだろうといった、生徒それぞれの個性も分かり、最初から学級運営を軌道に乗せることが可能となりました」

成績上位層の把握にも力を入れた。中学訪問で得た情報と1年生4月に行ったスタディーサポートの結果を元に、難関大を狙えそうな生徒をリストアップした。1年生7月には「難関大説明会」を開催。希望者を対象としたが、事前申請のなかった生徒にも、担任が個別に声を掛けて参加を促した。説明会では九州大をはじめとする難関大の魅力、難関大入試の傾向や対策について伝え、意識付けを図った。

「九州大オープンキャンパス・ツアー」で進学意欲を高める

生徒の意識が難関大に向かうよう、日常の指導においてもさまざまなアプローチを試みた。学年集会では、折に触れて「A大でこういう研究成果が出た」「B教授の業績が世界で評価された」と話し、難関大の魅力を伝え続けた。

2年生以降の模試では、志望校の欄に「九州大」と書いてみるよう促した。3学年主任の池平和博先生はその狙いを次のように話す。

「生徒の中には、『九州大は自分と関係のない大学』と思い込んでいる者もいます。九州大の名前を書き続けることによって、より身近に感じ、自分にも合格の可能性がある大学だと捉えてほしいと考えました」

難関大への意識付けには大学の空気を実際に感じることも有効と考え、09年度からは2年生の希望者を募って九州大オープンキャンパス・ツアーを開催。事前に学部・学科研究（九州大の教授を招いての模擬授業など）を行い、オープンキャンパスへの期待感も高めている。ツアーは九州大の文系・理系、及び熊本大の計3回で、約80人の生徒が参加した。また、これとは別に、全学年の保護者を対象に、PTA研修旅行で九州大を訪問した。地元志向の強い保護者の意識改革も試みたのだ。

上位層の頑張りが 生徒の意欲に火を付ける

2年生の秋には、修学旅行を兼ねて国内体験学習を実施した。生徒は、グループごとに京都大、大阪大、神戸大、神戸外国語大のいずれかを見学する。こちらは九州大と違い、オープンキャンパスではなく、普段の大学の様子を見学

*プロフィールは取材時(2011年3月)のものです

した。大阪大、神戸大、神戸外国語大では、大学の厚意により、オリエンテーションや特別講義が実施され、実験施設なども見学できた。

こうした施策の結果、46期生が2年生11月時点で行った進路希望調査では、九州大を志望する生徒が前年度の約1.5倍に増加した。

「本校の生徒は、高校入学時の学力にそれほど差がありません。自分と大差がないと感じていた友だちが難関大を目指すようになることで、中・下位層の生徒も『自分にも出来るかもしれない』『みんな頑張っているから自分も頑張ろう』と思うようです。上位層の意識に引く張られて、中・下位層もより高い目標を目指すようになりました」(福元先生)

担任会を通して 進路と学年団が連携を図る

生徒の意欲を刺激する一方、教師の意識変革にも着手した。同校では伝統的に、課外の内容等の進路指導部関連の行事も、最終的に学年団で決められることが多かった。そのために、教師個人の努力で取り組みが終わり、他学年に継承されにくい状況があったのだ。

「毎年安定した実績を出すためには、学校としての統一的な指導方針や3年間を見通した進路指導体系があるべきだと思います。しかし、本校の場合は学年主導の傾向があり、

学年ごとに実績や運営方法が大きく異なることもありました」(玉利先生)

また、鹿児島県では、同校も含めて30代と50代半ば以上の教師が多く、40代の中堅が少ない。若手教師にベテラン教師の指導ノウハウが継承されにくいという構造的な問題もあった。

こうした組織としての課題を解決するために進路指導部と学年団との連携を強化しようと、46期生の学年団では週1回の「担任会」で生徒の情報を共有し、取り組みに対する目線合わせを行った。学級担任で進路指導部副主任でもある福元先生が、進路代表として進路指導部の意向を学年団に伝え、進路と学年を連携させる役割を果たした。そして、進路指導部主任の玉利先生は、3年生の担任会に毎回出席し、他学年ではどのようにしているのかといった情報を伝え、学年間での取り組みの継承も図った。

「進路指導部が担任会に入ること、話し合いの幅が広がり、学校としての一貫性が保たれるようになりました。学年団にとっても、進路指導部から枠組みを示されることで共通理解が図られ、安心して指導に取り組めるようになりました」(池平先生)

更に、進路指導部と学年団の連携を深めるため、進路指導部主任を除く企画のメンバーに、各学年、及び5教科の教師が入るようにし、進路指導部の考えが各教科、各学年に伝わるよう配慮した。

学級担任と教科担任が 生徒の志望校情報を共有

46期生では、スタディーサポートのデータ共有も重視した。成績上位層の把握に活用する他、各学年の春と秋に実施するスタディーサポート(3年生は春のみ)により、基礎学力と学習習慣定着の度合いを学年・教科・進路で共有している。

2年生以降は、模試で生徒が記入した志望校を学級ごとに一覧表にして、学級担任と教科担任が共有する体制も整えた。

「これまで、教科担任は生徒の大きな成績を把握しているものの、志望校までは確認していませんでした。授業を受け持つ教師が生徒の志望校を把握することで、授業や職員室前の廊下学習(写真)などの日常の場面で、志望に応じた効果的な発問や声掛けが出来るようになりました」(池平先生)

データ共有の一環として、数学科では46期生から、設問別の正答率を実際の問題に記入し、各教科担任に配付する取り組みを始めた。これにより、どの問題、どの単元で生徒がつまづいているのが明確になり、補習や課題で弱点を補強できるようになった。次の学年を教える際、同じ部分でつまづかないよう授業の見直しに生かすことも出来る。

「学力検討会」も重要な情報共有の場だ。同



廊下学習の様子。朝7時半からと放課後、職員室前に並べられた机を使って自習をする生徒も多い

校では定期考査の他、模試や校内実力テストなど毎月1回テストがある。それに合わせて、1、2年生は隔月、3年生は毎月、学年会を利用して学力検討会を実施し、学年団と教科担当がテスト結果を共有したり、課題について話し合ったりしている。各教科が実力テストや定期考査の前に、出題意図と予想平均点を実際の結果と比較検討後、生徒の理解が不足している部分については今後の対策を立てるといふ指導の流れを構築した。

担任と進路指導部、学年団と教科担当というように、教師同士が縦横に連携することで、さまざまな角度から生徒を把握する体制が整えられてつある。

中・下位層からも 難関大を目指す生徒が現れる

3年に及ぶ改革は、同校に多くの変化をもたらした。一つは、改革の最大の目的であった、難関大受験に対する生徒の意識の変化である。

「46期生では中・下位層から難関大を志望する生徒が現れました。これは今までになかったことです。九州大が遠い存在ではなくなり、自分にも手が届くかもしれないと考える生徒が増えたからでしょう」（玉利先生）

11年度入試で九州大や熊本大を志望した生徒の中には、当初就職を希望していた生徒もいたという。

ただし、11年度入試における実際の難関大受験者数は、当初期待していたほどは伸びなかった。センター試験で目標点を超えたら九州大に挑戦すると言っていた生徒が、目標に達したにもかかわらず鹿児島大に出席した例もあった。

「依然として保護者の地元意識が強いことが要因の一つだと考えています。最初から鹿児島大しか念頭にない保護者も、面談でそれを公言する方はほとんどいません。とりあえず九州大を目指して頑張らせれば、鹿児島大に確実に合格できる力が付くと考えているからかもしれません。いかに保護者の意識を変えていくかが、これからの大きな課題です」

（福元先生）

生徒一人ひとりの 可能性を広げる指導を模索

もう一つの成果は、教師の意識の変化だ。

進路指導部の企画は模試や土曜補習など授業時間外に行うものが多いが、それらの提案に対しては必ずすべての教師が前向きに協力している。部活動の大会と模試が重なった場合は、部の顧問自ら、事前に進路指導部に相談を持ちかけて、善後策を確認するようになった。顧問によっては、「生徒は大会に連れていきますが、別の日に私が監督して模試を受けさせます」というように自ら代替案を申し出る場合もあるという。

「生徒に高い目標を持たせるにはどうすればいいのか、志望を実現させるために何をすべきなのかということを考える中で、目の前にいる生徒を育てるのは自分自身であるという意識をより多くの先生方が持つようになったと思います。すべての生徒には大きな可能性があります。高校生活の過ごし方次第で、その可能性は広がることもあり、また狭まることもあり。生徒の力を信じ、日々の指導に全力を傾けることが、生徒の目標を高め、志望実現に向かって努力させることにつながる。そのことを、すべての先生方が意識することで、本校はもっと発展していくと確信しています」（池平先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2009年10月号指導変革の軌跡「福岡県立八幡高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)